

---

# 嘘つきオオカミさん

laziness

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘つきオオカミさん

### 【NZコード】

N5668M

### 【作者名】

laziness

### 【あらすじ】

ある病と闘う少女と、「オオカミさん」と呼ばれる医者のお話。

私のせんせいお医者様おおかみはオオカミさんという人です。

名字が『大神』だからオオカミさんというのであって、童話に出てくる赤ずきんちゃんを食べちゃつ様な怖いオオカミさんじゃありません。

オオカミさんは黒縁メガネに白衣を着て、いつも首から聴診器をぶら下げています。他の人からは「大神先生」と呼ばれていますが、私としては「オオカミさん」の方が可愛いのでオオカミさんで通します。

で、そのオオカミさんなのですが。

私とオオカミさんが初めて会ったのは、私が七つの時です。

冬の寒い日の事で、家で大人しく遊んでいたら突然目の前が真っ暗になつて、気がついたら見知らぬ大きな男の人　　当時の私は同年代で比べても随分と小柄で、そりや子供から見れば大人の男性は大抵大きく見えるのですがそれでもオオカミさんの大きさはばは抜けっていて　　が目の前にいました。

お母さんもお父さんも涙をぽろぽろと子供の様に流していました。私にはいつも泣いちゃいけません、と言つて叱るのにずるいです。

そう言つてむくれたら、オオカミさんは私の頭をぽんぽんと軽く撫でて言いました。

今日から君が君のお家だよ、と。

それはおかしいです。

本当の私の家はこんなに真っ白じゃないし、本当の私の部屋にはベッドがありません。それに花だって飾つてないし、窓もあんなに大きくありません。

やつぱりたら、オオカミさんは困った様に笑いました。

君はここに引っ越してきたんだ。だから君も、君のクマさんはもうここにお引越し。

そう言つてオオカミさんは、私のお気に入りのクマさんをひょいと差し出してくれました。

私がそれを抱きしめると、オオカミさんはふわあつと柔らかい顔をしました。

けれど暫くしたら、お母さんとお父さんと一緒に部屋を出てしましました。

一人ぼつちは嫌でしたが、クマさんはいたのすべつからだでした。

そうしたらまたオオカミさんは戻つてきました。

今度はお母さんとお父さんはいません。

お母さん達は？

私が尋ねると、オオカミさんはまた私の頭を撫でました。

お母さん達はお引越しのお手伝いに行つたよ。もう遅いから、君も

寝なさい。

そう言って、オオカミさんは私に布団をかけてくれました。なぜだか凄く疲れていたので、私はそのままぐっすりと眠ってしまいました。

その日から、私は一人で歩く事が出来なくなってしまった。

起きる時もオオカミさんに起こしてもらつて（『飯は一人でちやんと食べます。ピーマンとニンジンが嫌でしたがオオカミさんは食べなさい』といつので仕方なく食べるフリをしました）、『くるまいす』とこうものに乗つてオオカミさんにあちこち案内してもらつたり（おトイレの時は他の女人人が手伝つてくれました。オオカミさんはサボつているのでしょうか？）、寝る時はオオカミさんが私が寝るまで傍にいてくれたので寂しくありませんでした（たまにオオカミさんも私の部屋で寝てしまう時があるのですが、疲れているみたいだったのでそのままにしておきました）。

お母さんとお父さんは毎日会こに来てくれます。  
けれど何だか寂しそうで、泣いてしまいそうに辛そつな顔をしています。

そんな顔で会いに来ても嬉しくありません。

そういう事を言つてはいけません。一人とも忙しいのに毎日会つてくれるんだから、「ありがとう」って言わなきゃ駄目でしょう？

そういう事を言つてはいけません。一人とも忙しいのに毎日会つてくれるんだから、「ありがとう」って言わなきゃ駄目でしょう？

せひ、オオカミさんは怒りました。

何で怒ったのか、私はよく分かりませんでした。

オオカミさん、オオカミさん。

少女はそう言って、私の冷たい手を取る。

彼女の小さな手越しに、その温かさが伝わる。

どうしたの？

そう聞くと、彼女は一枚の色紙と鉛筆を取りだした。

七夕のお願い、オオカミさんは何をお願いするの？

その無垢な笑顔に、無邪気な言葉に。

私の心臓が音を立てて軋んだ。

ギリギリと締めあげられる様な錯覚に陥りながらも、私は長年培つてきた『上辺だけの笑み』を湛えた。

そういう君は、もう何をお願いするか決めたの？

あのね、あのね！

言つて、彼女は身を乗り出せんばかりに笑う。

私、今度のお誕生日会にオオカミさんが作ったケーキが食べたい！

看護師の一人が洩らしたのだろう、私が菓子作りが出来るという情報を得た彼女はもうお願いとこりよりおねだりに近いそれを満面の笑みと共に放つ。

オオカミさんの作ったケーキは凄くおいしそうでみんな言つてたのに、私はまだ食べた事無いから食べたいの！

言つて、彼女はお氣に入りのティーベアを抱き締めた。  
酷く無垢で無邪気なそれは、けれど、私にとってはあまりにも残酷な言葉だった。

ねえ、オオカミさん！

そう言つて笑う彼女は、まるで外の蝉の様に喧しい。  
けれど風鈴の様に澄んだ聲音で私を呼ぶその声は、何故か愛おしく思えた。

だから私は笑う。

いいよ、ど。

たくさん食べなせてあげるよ、と。

そう言えば、彼女は向日葵の様に鮮やかな笑みを浮かべるのだ。

だから私はオオカミ（しだじつ）を隠す為におばあさん（うや）の

毛皮を被る。

毛皮を被つて静かにその牙を研ぎ澄まし、じつと待ちかまえる事が出来ない。

夏の終わりと共に訪れるであらつ最期の刻を迎える為に。  
赤ずきんちゃんが食べられる（しぬ）その瞬間を静かに待ちかまえる。

嗚呼、だからそんな笑顔を向けないで。

私はオオカミさん（わかつき）なのだから。赤ずきんちゃん（きみ）  
を食べてしまつ（みじろす）悪者なのだから。

物語で、赤ずきんちゃんはオオカミに食べられてしまつ。  
その瞬間に、彼女は何を思ったのだろう？

あつと絶望しただらう。  
あつと憤慨しただらう。

嘘つきのオオカミは自分の腹を満たす為に赤ずきんちゃんを食べた。

なら私は？

彼女を見殺しにしてしまつだらう私に、彼女は果たしてどんな顔を  
向けるだらう？ どんな感情を抱くだらう？

あつと絶望するだらう。  
あつと憤慨するだらう。

嘘つきのオオカミさん（わたし）は自分を守る為に赤ずきんちゃん  
(かのじょ) を食べる（みじろす）。

だから私は毛皮を被る。

やがて訪れるその時まで、彼女をたっぷりと肥やしていく。  
その時が訪れた時、そこに心残りがないように。

外で鳴く蝉の声が、一つ、消えた。

(後書き)

一時期は連載も考えた（けど話が続かなかつた）没案を纏めてみました。  
仮に連載になつていっても三〜五話程度の中編程度にしかなりません  
が。

何か感想があればバシバシビツビツ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5668m/>

---

嘘つきオオカミさん

2010年10月28日03時10分発行